

【ポスターセッションの場合のみ記入 9pt 明朝・左端揃】

外国人介護福祉士希望者の初期段階での介護福祉実践の困難性の研究
— 来日直後における課題と言語習得以外にも着目した総合的な支援の在り方 —

○東京家政学院大学 朝倉 和子 (006215)

西口 守 (東京家政学院大学・003468)

キーワード：外国人介護人材、初期困難、福祉人材育成

1. 研究目的

現在の日本社会における介護人材不足は深刻であり、経済連携協定（EPA）の他、2016年11月には技能実習制度への介護職種追加、さらに在留資格「介護」が2017年9月に創設された。本研究の目的は、我が国において介護福祉士養成の専門教育を受け、介護福祉士の取得が前提である在留資格「介護」に注目し、日本語学校、介護福祉士養成校、国家資格取得という長期間の育成過程において段階別に留学生が抱く課題と必要な支援を明らかにすることにある。日本語能力のみにて評価されがちな留学生を日本語能力以外でも総合的に適切に評価し支援する重要性に注目し、A・ブラックワイス、F・ブレナンによる「直観タイプ」「知識タイプ」「実践タイプ」の学習者のタイプを参考とし、留学生への段階的支援方法を明らかにしていく。今回は特に、在留資格「介護」として2018年4月に来日したベトナム人留学生を対象とし、日本語や日本文化の習得が未熟な段階である来日直後における課題と支援方法に着目した。さらに、今回の調査結果から抽出された留学生達が課題としている「日本語習得の困難性」「精神的支援」「人間関係」の3つの要因を中心に外国人介護福祉士希望者への課題と支援の方法を明らかにする。

なお、本研究は、筆者が関わっている NPO 法人とベトナム日本語学校、日本の高齢者施設とが提携し、介護福祉士を目指すベトナム人留学生を育成するプロジェクトの一環である。

2. 研究の視点および方法

対象：2018年4月に在留資格「介護」として来日したベトナム人留学生5名（男2：女3）。日本語能力はN4取得者2名、未取得者3名。来日経験は5名いずれも無し。

期間：2018年4月23日～5月1日

方法：調査方法及び分析方法は、質的調査に準じるが、対象者は日本語の理解が不十分なため、インタビューではなく紙面によるアンケート調査（自由記述形式）を実施した。来日直後（約1か月間）における困難と解決方法を明らかにするための設問をインタビューガイドの代替とした。日本語が理解できるベトナム人によって翻訳と説明をもらった。自由記述の中から、キーワード、カテゴリーを抽出した。

内容：①なぜ、日本で介護の仕事をしたと思ったのか、②来日前に準備したこと③来日して現在困っていること、④困っていることを解決するためにしていること、⑤困ってい

ることを解決するために必要だと思っていること、手伝ってほしいこと(一緒に来日した留学生、日本にいるベトナム人、働いている施設、NPO 法人、ベトナムの日本語校、日本の日本語学校)、⑥来日 1 ヶ月となり、来日前に準備をしておけば良かったと思うこと、⑦現在の課題、目標

3. 倫理的配慮

一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し、アンケート実施時に研究協力への承諾書を交わした。個人は特定されないこと、回答データについては研究結果として公表されること、回答データについては本人が確認できること、いつでも回答を拒否できること、回答データは研究責任者が厳重に管理すること等が含まれている。承諾書についてもベトナム語に翻訳し説明をした。

4. 研究結果

アンケートの結果から留学生が現段階で挙げる課題として①日本語習得の困難性②精神的支援③人間関係の構築が抽出できた。

概念的カテゴリー：上位コード：コード

①日本語習得の困難性：日本語の特性：(日本人は)話すのが早い。音読み、訓読の存在。

経験の浅さ：日本人と話す機会が無かった。

②精神的支援：共感・励まし { 困っている時に励まして、共感して相談にのってほしい。
(ベトナム日本語校スタッフで日本の施設勤務の)先生には引き続き支援してほしい。

③人間関係：安心・応援してくれている：(職員、利用者)みんな応援してくれている。

施設職員の対応の丁寧さ：仕事も丁寧に教えてくれた。

立場の違い：ベトナム人と日本人は立場が違う。

5. 考察

来日直後の段階では、留学生は自身に共感をしてくれる存在を求めている。A・ブラックワイス、F・ブレナンは直観タイプの学習者を「自分のセンスもってのはじめる。クライアントの情緒に対して容易に共感をもって反応する」としているが、来日直後の日本語習得が未熟な段階では、留学生はまさに直観タイプの学習者であり、日本語能力以外(情緒や感性)での評価や支援も適切に行われることの重要性が挙げられる。また、人間関係への困難性は表出されなかったが、これは本プログラムの過程で留学生の来日前から受入施設が訪越し、本人と面談、Skype やメール等で継続したコンタクトを取る等の事前コンタクトの効果があったものと考えられる。一方で、日本語習得の問題から困難性を表出できていない可能性やベトナム人であるため、日本人とはまだ分かり合えないとの意識が困難性の表出を妨げている可能性も考えられた。在留資格「介護」には日本語学校、養成校、施設と多様な資源に係るが、留学生の段階的支援の標準化の確立の必要性が挙げられた。